

伝統の技 …… S邸



屋根裏を見る

軒裏を見る



地元の伝統民家S邸において、寺社建築で見られる“**扇垂木**”を建築主の意向(というより棟梁の心意気)で採用する事になった。この伝統意匠は私にとっては2軒目の住宅であり、これらの知識のある方には分るが掛かる手間と費用は半端ではない。残念なことに“町家の大工”でこの仕事を未だに出来る人は殆ど居なくなったが、注文する施主も同様である。設計者冥利に尽きる仕事ではあるが同時に図面化は大変である。水面で優雅に泳ぐ白鳥の水中の脚の如く、出来上がった外観からは想像も出来ない納まりが屋根裏に内蔵されている。実に“複雑怪奇”な、ある意味決して綺麗とは言えない？が、実に巧妙なバランスで成り立っている納まりである。もうひとつの建物では傘の骨同様、中央に集まった垂木の上から、抑えの丸太を使って 天秤にして垂木の垂れ下がりを防いでいる納まりとした。

プレカット旺盛の昨今のプレファブ住宅で育った設計者には想像が出来ない世界かと思うが、この住宅の仕口や継手は教科書に出てくる“お手本”が一杯使われている。伝統の技を使えば耐震性は全く問題にならないかと思うが。…………… 今時の建築基準法はどうしたもんじゃろ～かな？

玄関軒裏の“扇垂木”



梁 金輪継ぎ手